

横手市の古墳時代遺跡群

島田祐悦（横手市教育委員会）

1. はじめに

秋田県内では、縄文時代や平安時代の遺跡が、数千から数万カ所と確認されている中で、古墳時代の遺跡は、古墳時代と並行する続縄文時代の遺跡を含めても 20 カ所にも満たず、様相が不明な状態であった。古墳時代とは、その名のとおり日本列島において古墳が造られた時期ではあるが、横手市を含めた秋田県域では、古墳時代の古墳が現在のところ確認されていない。そのため、この時期に並行して存在した続縄文時代の範疇として、これまで捉えられてきた。近年の横手市内の圃場整備事業の伴う発掘調査において、古墳文化の集落が相次いで発見され、平成 30 年度の一本杉遺跡の発掘調査によって、秋田県全体の古墳時代の様相が検討できるようになってきたのである（横手市教委 2018）。その評価については、菊地先生の研究成果等で取り上げられることとなった（菊地 2019、高木 2019）。

2. 秋田県の古墳時代研究史（1960～2004）

『秋田県史 考古編』（奈良他 1960）や『秋田県の考古学』（奈良他 1967）によれば、由利郡象潟町（にかほ市象潟）上浜大砂川から「金環」が江戸時代に出土し、その実測図が提示されている。さらに由利郡西目村（由利本荘市西目）井岡で、古墳があったところから子持勾玉出土したと伝えられており、古墳時代初期のものと記述されている。この他の古墳時代の遺跡の記述は、終末期古墳または末期古墳と呼ばれる古墳の記述であるが、これらは奈良・平安時代に造られた古墳であり、在地有力者の墓とされる。横手市雄物川町造山の蝦夷塚古墳群や羽後町の柏原古墳群もこの範疇に入る（島田 2004、鈴木 2004）。

『秋田県の考古学』（奈良 1967）では、秋田県土師器編年図表が示されており、この中で古墳時代の土師器に該当するものとして、沼田（由利本荘市西目・宮崎遺跡と同一）・小谷地（男鹿市脇本小谷地）・昭和・乱橋（潟上市乱橋）などが紹介されている。

1980 年代から 2000 年代の発掘調査や論文等によって、古墳時代の土器が整理されていった。ここでは、利部氏の論文を参考にして加筆しながら進めていく（利部 2004）。

1981 年、男鹿市教育委員会が小谷地遺跡の発掘調査を実施し、埋没家屋の床面から弥生土器と土師器が混在しながら一括して出土した（男鹿市教育委員会 1982）。大野憲司は土師器を宮城県南小泉遺跡との比較から 5 世紀と位置付けた。埋没家屋については、現在は「堰跡」と考えられている（秋田県 2011）。しかし、この遺跡の意義は、古墳時代の土師器がまとまって一括で出土したことである。

1983 年、横手市教育委員会が同市塚堀のオホン清水遺跡（さらに A・B・C 区と分かれており、B 区より古墳時代の遺構・遺物が確認された。）を発掘調査し、1 号住居跡とその周辺から多くの土師器が、

須恵器の有蓋高坏 1 個体が出土した（横手市教育委員会 1984）。澤谷敬氏は類例を小谷地遺跡や南小泉遺跡に比定される岩手・宮城・山形の諸県の類例と比較した。この調査の意義は、秋田県で初めて古墳時代の住居が 1 軒のみであるが検出されたこと、古式須恵器も初めて出土したことである。この須恵器は大阪府堺市陶邑窯跡群の TK208 型式である（横手市教育委員会 2018）

1986 年、秋田県教育委員会は能代市浅内の寒川Ⅱ遺跡を発掘調査した（秋田県教育委員会 1988）。6 基の楕円形の土坑墓が検出され、1 基を除く 5 基の土坑墓からは、弥生系土器の他に続縄文土器（後 C2・D 式）がまとまって出土した。さらに黒曜石も出土している。当遺跡は、北方の続縄文文化と弥生文化・古墳文化の接点を考察する上で、極めて重要な発見であった。小林克氏は土坑墓の年代を 4～5 世紀とした。遺跡の年代については研究者によって異なるが（相田 2014、八木 2015）、3～4 世紀を中心とする見解である。

1987 年、西目町教育委員会が同町沼田の宮崎遺跡を発掘調査した（西目町教育委員会 1987）。2 号住居跡が土師器の他、破片であるが、続縄文土器の北大Ⅰ式土器が出土した。また、付近の土坑から須恵器有蓋坏と蓋が出土した。土師器と北大Ⅰ式土器の共供は、古墳文化と続縄文文化の関係をさらに一歩進める結果となった。須恵器については、陶邑編年の TK23 型式に近いとした。

1990 年、秋田県教育委員会は横手市婦気大堤字下久保の田久保下遺跡の発掘調査をした（秋田県教育委員会 1992）。8 基の楕円形や長方形の土坑墓が検出され、土師器を主体に須恵器も含んで多くは 2 個一対の状態出土した。土師器には北方的要素を含んだものがある。寒川Ⅱ遺跡・宮崎遺跡とともに続縄文文化と古墳文化を比較する上で重要な遺跡である。高橋学は土師器の観察から、宮城県角田氏住社遺跡が標識の住社式の範疇とし、埴（壺）を前型式の宮城県引田遺跡が標識の引田式もしくは南小泉式に後続する資料と評価した。また、須恵器は陶邑編年の MT15～TK10 型式に並行するとした。

2001 年、納谷信広は「西目町宮崎遺跡出土の土師器について」を発表した（納谷 2001）。宮崎遺跡の発掘資料を見学した際に表面採集資料の中に、小型器台の受け部の底部と脚部の上部にあたる破片、同時代で能登型甕と類似した甕の口縁部を見出し、宮城県の塩釜市から出土した土器を標識とした塩釜式段階（4 世紀）とした。

利部氏は、「7 世紀段階の資料も含めて、60 年代の未発掘資料による資料集成・編年模索段階から、80 年代以降の発掘調査資料の蓄積段階を経て、90 年代後半の発掘調査資料を中心にした編年構築段階と、秋田県古墳時代研究の推移が見られる。特に 80 年代後半から 90 年代にかけて、北海道系土器やその関連土器が発掘調査で出土したことは注目される。そして 2000 年代に入って初めて、4～7 世紀の古墳時代土器が見通せるようになってきたのである。」と記述している。

しかし、続縄文時代の遺跡発見のインパクトが強いためか、秋田県埋蔵文化財センター主催の『秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会』に所収される年表は、秋田県の歴史の項で、平成 24 年度の年表での古墳時代は「○北海道と同じ土器や墓がつくられる。」と記述され、令和 2 年度では、「○狩猟・採集を中心とする生活に稲作が加わる。○北海道と同じ土器や墓がつくられる。○北海道と同じ墓に土師器や鉄製品がくわわる」と続縄文時代を中心とした歴史感となっており、古墳文化の状況が抜けてしまい、秋田県が 4～7 世紀を通して続縄文時代という印象を与えている。

3. 秋田県の古墳時代研究史（2005～2020）

平成 17 年（2005）の平成の大合併以降、横手市で圃場整備事業に伴う横手市教育委員会による緊急発掘調査において、県内で発掘調査事例が非常に少ない古墳時代から飛鳥・奈良時代の遺跡が相次いで発見された（報告書については、紙上報告の横手市発掘調査報告書一覧を参照されたい）。

平成 18 年に、横手市雄物川町会塚で、会塚田中 B 遺跡の発掘調査を行った。古墳時代は工事立会調査範囲であったが、土坑 2 基が確認され、高坏がまとまって出土した。高坏の内側に付着した炭化物は分析した結果、玄米であった。この場所は、「大塚」集落の南東に位置し、遺跡の西側には塚らしい高まりがあることから、古墳時代の古墳の可能性もある場所である。

平成 19 年（2007）に、根岸洋は『横手市史 考古編』で、秋田県埋蔵文化財センターが昭和 62 年（1987）に、横手市大森町下田で発掘調査が行われた下田遺跡から出土した弥生土器を、続縄文土器の後北 C1 式に比較できるが、そのものではないとしている（根岸 2007）。

平成 23 年（2011）に、一本木遺跡の発掘調査報告書を刊行した。これは平成 9 年に横手市黒川の宅地造成に伴い、横手市教育委員会が緊急発掘調査をしたものであった。遺構は不明であったが、包含層が古墳時代の土師器が一括で出土したものである。横手盆地で最北の発掘調査事例である。

平成 25 年（2013）に、秋田県埋蔵文化財センターで『蝦夷と俘囚』の企画展で行われた。ここで県内の古墳時代の遺物が展示され、未発掘（表採）資料として潟上市の北野遺跡と乱橋遺跡の土師器が展示された（秋田県埋蔵文化財センター 2013）。

同年に、横手市雄物川町薄井で神谷地遺跡と小出遺跡の発掘調査を行った。これら遺跡は沢を挟んで対岸に位置していたと考えられ、遺跡ごとに竪穴建物跡 1 軒と掘立柱建物跡 1 棟が検出された。掘立柱建物跡の検出は秋田県で初めてであった。古式須恵器破片が 3 点出土したことも重要である。土師器は小出遺跡の沢の落ち際からまとまって出土した。高坏が多いことや小型丸底壺の存在から、東北の太平洋側の標識である宮城県南小泉式期（5 世紀前半）の資料ではないかと推測したのであるが、後に一本杉遺跡の土師器の検討によって、南小泉式ではなく、日本海側の標識遺跡である石川県小松市の漆町遺跡の 13 群（新）段階であることが確認されることとなる。

平成 29 年（2017）に、横手市平鹿町下吉田で一本杉遺跡の発掘調査を実施した。調査面積 7,000 m² を超えるもので、5 軒の大型の竪穴建物跡とそれを取り巻く溝跡、土坑などを検出し、大量の土師器が出土した。これまで秋田県の集落跡では、調査区内で 1 軒の竪穴建物が確認されるのみであったが、一本杉遺跡では、初めて複数以上の竪穴建物からなるものであった。また、大量の土師器から、これまでの遺跡から出土する土師器が断片的に年代を把握するものであったのに対し、相対的に土器変遷を検討することができ、秋田県全体の年代を把握することが可能となったのである。続縄文文化の産物としての黒曜石の出土は確認されず、太平洋側とは異なる状況であることも明らかとなってきた。しかし、土器組成は並行関係にあり、一本杉遺跡の年代については、5 世紀第 3 四半期と想定された。古式須恵器破片も 3 点出土し、TK208 型式でほぼ土師器と同様の年代である。

2010 年代は、発掘調査事例の増加による、良好な資料が蓄積されたことが大きい。このことから土師器の器種構成や地域性を検討することが可能となった。秋田県出土の土師器が、これまでの太平洋側との比較検討から、日本海側への比較検討と幅が広がり、土師器・須恵器の全国的な斉一性を考慮

に入れる必要が生じてきているのである。

4. 秋田県古墳時代の遺跡【図 1.5】

【3世紀～5世紀前半以前】

- ・古墳文化の遺跡 (2) : 宮崎遺跡・井岡遺跡 (由利本荘市)
- ・続縄文文化の遺跡 (3) : 寒川Ⅱ遺跡 (能代市)、下田遺跡 (横手市)、川端山Ⅲ遺跡 (美郷町)

【5世紀後半】

- ・古墳文化の遺跡 (14) : 宮崎遺跡 (由利本荘市)、小谷地遺跡 (男鹿市)、乱橋遺跡・北野遺跡 (潟上市)、上野遺跡 (大仙市)、一本杉遺跡・会塚田中 B 遺跡・神谷地遺跡・小出遺跡・一本木遺跡・オホン清水 B 遺跡・郷土館 B 遺跡・五味川遺跡 (横手市)、大久保郡山遺跡 (羽後町)。
- ・続縄文文化の遺跡 (1) : 宮崎遺跡 (由利本荘市) 未発掘 (表採資料) はトーン

【6世紀～7世紀前半】

- ・古墳文化の遺跡 (2) : 田久保下遺跡・中藤根遺跡 (横手市)
- ・続縄文文化の遺跡 (1) : 田久保下遺跡 (横手市)

◎全体で 21 遺跡 (宮崎遺跡・田久保下遺跡が重複) あり、古墳文化が 18 遺跡、続縄文文化が 5 遺跡。

5. 横手市古墳時代遺跡群の土師器の種類【図 2】

高 坏 : 古墳時代の主たる器種。東北太平洋側では 5 世紀後半になると激減するとされてきた。遺跡内では、古いものはシャープで口縁部が外反するものや坏身の稜が明瞭なものが多いが新しいものになると不明瞭な段が混在する。

有段高坏 : 高坏の坏身や裾に 1 条の隆線を施すもの。5 世紀中葉ころまで存在。

「鉢・碗」 : 高坏が激減するのに対し、増加していくもので、5 世紀後半以降主たる土器になる。

古いものには鉢形・甕形があるが、新しくなると碗型が主流。

丸底壺 : 小型と中型があるが、5 世紀前半には小型が、後半は中型が主たるものになる。

有孔鉢 : 底部に穴が空いている土器。甌か濾過器とされる。5 世紀後半に台形から甕形になる。

壺 : 口縁部を折り返す折返口縁や二重の口縁部を持つ二重口縁があるが、5 世紀後半に簡略化する。

甕 : 口縁部は、古いものはシャープな「く」の字形だが、新しくなると緩くなる。胴の張る球胴形から胴の長い長胴形に形態が変化する。

ミニチュア土器 : 「鉢・碗」をミニチュア化したものと思われ、祭祀用の器種の可能性も。

*これらの土器の特徴は、太平洋側というより日本海側の特徴と指摘されている。一本杉遺跡をはじめとした周辺遺跡では、高坏を比較的長く使用していることや、甕の底が太平洋側では平底であるのに対し丸底であること、また同時期に竪穴建物跡にカマドが設けられていないことなどである。しかし、土器の併行関係についてはほぼ同時期と考えられる。

*北陸地方では、小型丸底壺の消失・碗やミニチュア土器の隆盛・TK216～23 型式 (後述) の須恵器

が共伴することなどから、5世紀第3四半期頃の特徴とされる。南東北では、有段高坏や小型丸底壺の消失・カマドの導入に伴う大型甑の出現・埴・坏類の平底から丸底の変化が5世紀第4四半期と考えられているが、一本杉遺跡はそれ以前の特徴があるので、5世紀第3四半期頃とされる。

*土器の形態から一本杉遺跡 SI01, 07 竪穴建物跡が古く、SI02, 03, 06 竪穴建物跡が新しい。

6. 横手市古墳時代遺跡群の須恵器【図2】

○大阪府堺市陶邑窯跡群の発掘調査により、古墳時代の須恵器編年が示されており、5世紀段階は高蔵（TK）地区の窯跡が型式基準となっており、次の通りである（田辺1981）。

TK73 型式⇒TK216 型式⇒TK208 型式⇒TK23 型式⇒TK47 型式

- ・獲加多支鹵大王（雄略天皇）の銘文を持つ埼玉県稻荷山古墳出土の鉄剣には製作年代を示す「辛亥年」があり、471年の可能性が指摘されている。古墳から出土した土器はTK47型式よりやや古いものとされている。

○横手市古墳時代遺跡群と宮崎遺跡の須恵器

*TK208 型式 7点

- ・一本杉遺跡（横手市平鹿町）：有蓋坏2点・甕1点
- ・オホン清水B遺跡（横手市塚堀）：有蓋高坏1点
- ・神谷地遺跡（横手市雄物川町）：甕カ1点
- ・小出遺跡（横手市雄物川町）：無蓋高坏2点

*TK23 型式 2点

- ・宮崎遺跡（由利本荘市西目町）：有蓋坏1点・坏蓋1点

7. 横手市古墳時代遺跡群の竪穴建物跡【図3, 4】

一本杉遺跡はSI01, 02, 03, 06, 07の5軒。オホン清水B遺跡・神谷地遺跡・小出遺跡は各1軒。

平面形：全て方形であるが、隅は直角ではなくやや丸みを持つ。一本杉遺跡全てと神谷地遺跡は東西方向にやや長く、オホン清水B遺跡と小出遺跡は南北にやや長い。

規模：一本杉遺跡 SI01, 07 竪穴建物跡は長軸 10.26～10.49m、短軸 9.69～9.9mで面積 99.42～101.6 m²。一本杉遺跡 SI02, 03, 06 竪穴建物跡は長軸 8.18～9.39m、短軸 7.98～9.18mで面積 65.3～86.2 m²、オホン清水B遺跡は長軸 8.0m、短軸 7.6mで面積 59.6 m²、小出遺跡は長軸 7.0m、短軸 6.8mで面積 47.6 m²、神谷地遺跡は長軸 6.6m、短軸 6.3mで面積 41.6 m²。いずれも規模が大きい。一本杉遺跡は全て 65 m²以上を超え、SI01, 07 は約 100 m²と特段に大きい。

軸方向：一本杉遺跡 SI01, 07 は地形にあわせたもので、小出遺跡もその可能性が高い。一本杉遺跡 SI02, 03, 06 はほぼ真北を向き、外周溝が巡り、その建物配置は均等であるから、同時期の可能性が高い。オホン清水B遺跡と神谷地遺跡もほぼ北向きである。

貼床：小出遺跡のみ無し。他の竪穴建物跡の貼床は壁際の四隅が深くプランが一定ではない。これ

は竪穴建物を掘る際に壁際の四隅から掘り始め、壁をつなげる作業をした結果であろう。一本杉遺跡 SI06 と神谷地遺跡では床下検出のため貼床が周溝のように見えている。

主柱穴：全ての竪穴建物が4本柱。柱抜き取り痕は一本杉遺跡 SI02, 07・神谷地遺跡が大きく不均等なプランであるのに対し、一本杉遺跡 SI01, 03, 06・オホン清水B遺跡・神谷地遺跡・小出遺跡では円形。前者は柱穴中位に後者は柱穴確認面に土器を埋納。一本杉遺跡 SI01, 06 と小出遺跡では柱材が残存しており、その底部は平坦で黒色になっていたことから柱材に腐食防止のための加工が施されていた可能性が高い。

補助柱穴：神谷地遺跡・小出遺跡では無し。一本杉遺跡では東側か南東側の主柱穴軸線上に均等に2基の柱穴を構築、他の三方は主柱穴軸線上の中央部分に1基の柱穴を構築。オホン清水B遺跡は南北方向の柱筋上の主柱穴の中間に補助的柱穴を構築している。

床面小溝：一本杉遺跡では、補助柱穴から壁際に直線的に延びるもの、主柱穴から壁際に延びるものなどがある。床板を載せる転ばし根太などの据付掘り方で、幅10～20cmが一般的とされる。

出入口：一本杉遺跡は東壁際・南東壁際にある2本の床面小溝とその間の土坑を、オホン清水B遺跡では南壁際から中央に延びる柱穴列の間に土坑を、小出遺跡は南壁際に土坑を構築。これら土坑底面は焼けておらず、カマドもしくは炉ではないので出入口に関わる施設の可能性が高い。神谷地遺跡は貼床が途切れる北壁東側が出入口の可能性がある。

壁溝：床下検出の一本杉遺跡と神谷地遺跡を除き、いずれも確認。一本杉遺跡 SI02 では壁溝の中に板材跡を確認。

焼失家屋：炭化材は床面まで切土されていない竪穴建物跡全てで確認。一本杉遺跡 SI03 では垂木と横木を確認。

外周溝跡：一本杉遺跡以外は確認されない。一本杉遺跡 SI07 では南東に細い溝跡が一条のみ。一本杉遺跡 SI01, 03, 06 には、外側に細い溝跡が巡るように配置。一本杉遺跡 SI02 にも巡っていた可能性はある。外周溝跡の断面観察より東から西へ向かってやや傾斜しており、排水機能はあったと推定。類似事例は、近県では山形県で2軒、新潟県では49軒確認できるが、いずれも古墳時代前期で広い溝跡である。古墳時代中期では宮城県鴻ノ巣遺跡・新潟県ヘスリ遺跡1軒があるが、広溝式で、細い溝跡は石川県四柳ミツコ遺跡で1軒のみ確認される。

8. まとめ【図5】

- ① これまで秋田県では古墳時代の様相が不明で、続縄文文化圏の範疇とされてきた。しかし、一本杉遺跡の発掘調査成果から、これまで断片的であった古墳文化圏が形成されていたことが明らかになった。
- ② 古墳時代前期から中期前半の、古墳文化の遺跡の発掘調査事例がなく、表採資料で日本海側の宮崎遺跡では器台・甕が、隣接する井岡遺跡では子持勾玉が出土している。山形県庄内地方の事例からも秋田県沿岸部まで古墳文化の影響下に入っていた可能性が高い。
- ③ 続縄文文化の遺跡は、後北C1式期の下田遺跡、後北C・D2式期の続縄文土器が出土した寒川I遺跡と川端山III遺跡があるだけで、これらは弥生時代後期から古墳時代前半の範疇である。

- ④ 古墳時代中期後半（5世紀後半）から、突如として古墳文化の遺跡が急増する。日本海側では男鹿半島まで一気に北上する。西目潟周辺の宮崎遺跡と男鹿半島八郎潟周辺の小谷地遺跡・潟上市乱橋遺跡・北野遺跡が存在するが、面的な広がりではなく点的なものである。
- ⑤ それに対して、内陸の横手盆地では盆地中央部の横手市域内に古墳時代の遺跡が密集している。
- ⑥ その立地は河川沿いの微高地に展開している。雄物川中下流域では古墳文化の遺跡が未確認であることにより、古墳文化の流入は西目潟や子吉川河口域から石沢川を經由して横手盆地へ流入したことも考えられる。この道は古代の雄勝城と関わりがあると想定される。
- ⑦ しかし、これら古墳文化は長続きせず、5世紀末葉から6世紀前葉までには秋田県内では古墳時代の古墳文化の遺跡が確認されなくなる。
- ⑧ 古墳時代後期（6世紀前半～7世紀前半）の田久保下遺跡（横手市）では、続縄文文化の土坑墓が継続的に構築されるが、それに副葬された遺物は古墳文化のものが主体である。
- ⑨ 飛鳥時代から奈良時代（7世紀後半から8世紀）にかけて、古墳文化とほぼ同一の地域で、竪穴建物で構成される集落が展開するようになることから、故地としての場所は認識されていたと思われる。

【参考文献】

- ・相田泰臣 2014 「寒川Ⅱ遺跡」『古墳と続縄文文化』高志書院
- ・秋田県教育委員会 1988 『寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第167集
- ・秋田県教育委員会 1992 『富ヶ沢A・B・C竈跡・田久保下遺跡・富ヶ沢1号～4号塚跡』秋田県文化財調査報告書第220集
- ・秋田県教育委員会 2011 『小谷地遺跡』秋田県文化財調査報告書第472集
- ・秋田県埋蔵文化財センター2013 『蝦夷と俘囚』平成25年度企画展パンフレット
- ・男鹿市教育委員会 1982 『協本埋没家屋第4次発掘調査報告書』
- ・利部修 2004 「4 秋田の古墳時代土器とその遺跡」『出羽の古墳時代』高志書院 2004
- ・菊地芳朗 2019 「古墳分布北縁地域における交流の特質」『古墳分布北縁地域における地域間交流解明のための実証的研究』平成28～30年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 研究成果報告書
- ・島田祐悦 2004 「3 蝦夷塚古墳群」『出羽の古墳時代』高志書院 2004
- ・鈴木俊男 2004 「2 柏原古墳群」『出羽の古墳時代』高志書院 2004
- ・高木晃 2019 「北上川中流域における古墳時代中期社会の動向—胆沢扇状地を中心に—」古墳分布北縁地域における地域間交流解明のための実証的研究』平成28～30年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 研究成果報告書
- ・田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- ・納谷信広 2001 「西目町宮崎遺跡出土の土師器について」『秋田考古学』第47号 秋田考古学協会
- ・西目町教育委員会 1987 『宮崎遺跡発掘調査報告書』
- ・奈良修介他 1977 『秋田県史 考古編』秋田県
- ・八木光則 2015 「古墳時代並行期の北日本」『倭国の形成と東北』吉川弘文館
- ・横手市教育委員会 1984 『オホソ清水 第3次遺跡発掘調査報告書』横手市文化財調査報告10
- ・横手市教育委員会 2018 『一本杉遺跡』横手市文化財調査報告第44集

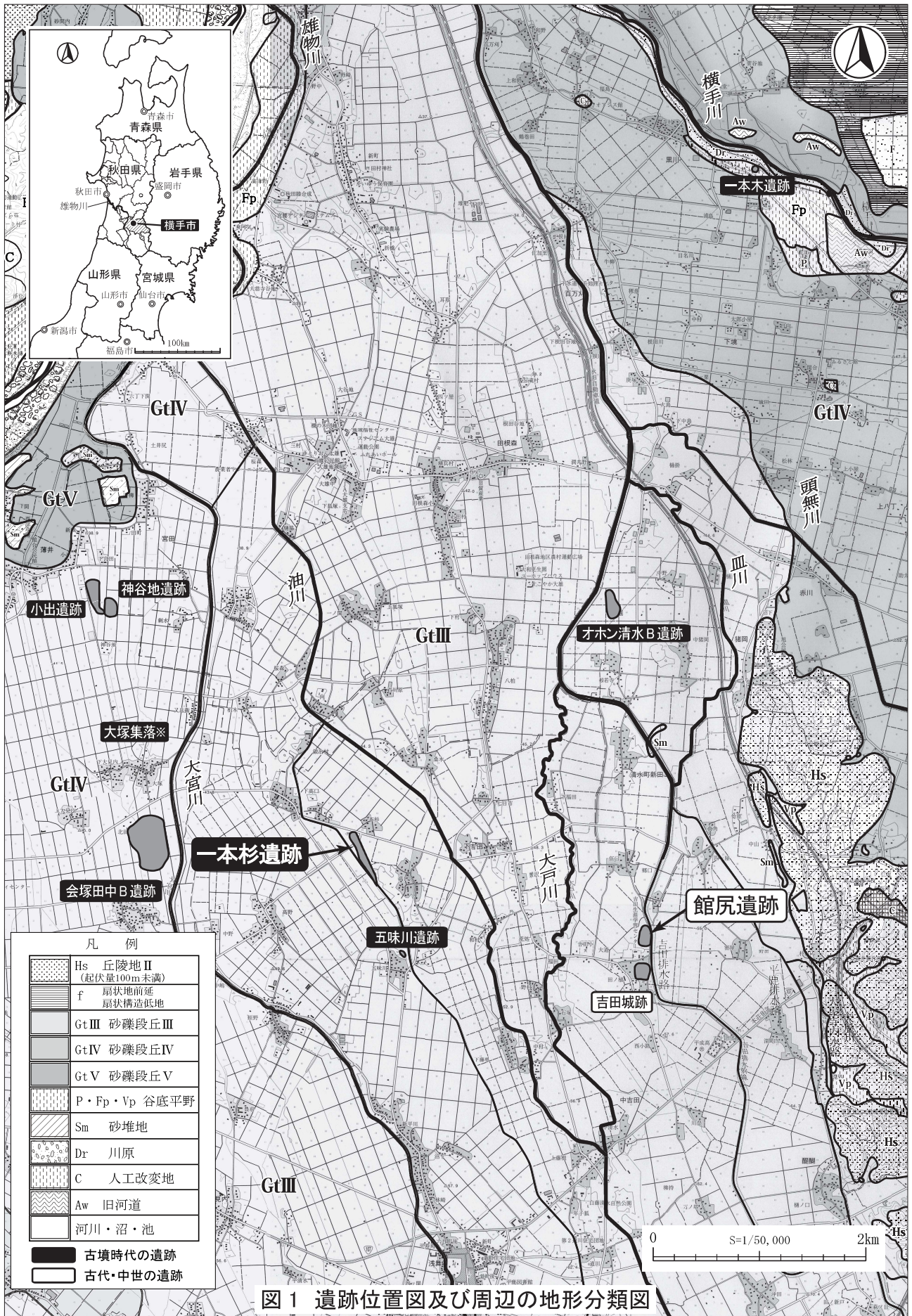


図1 遺跡位置図及び周辺の地形分類図

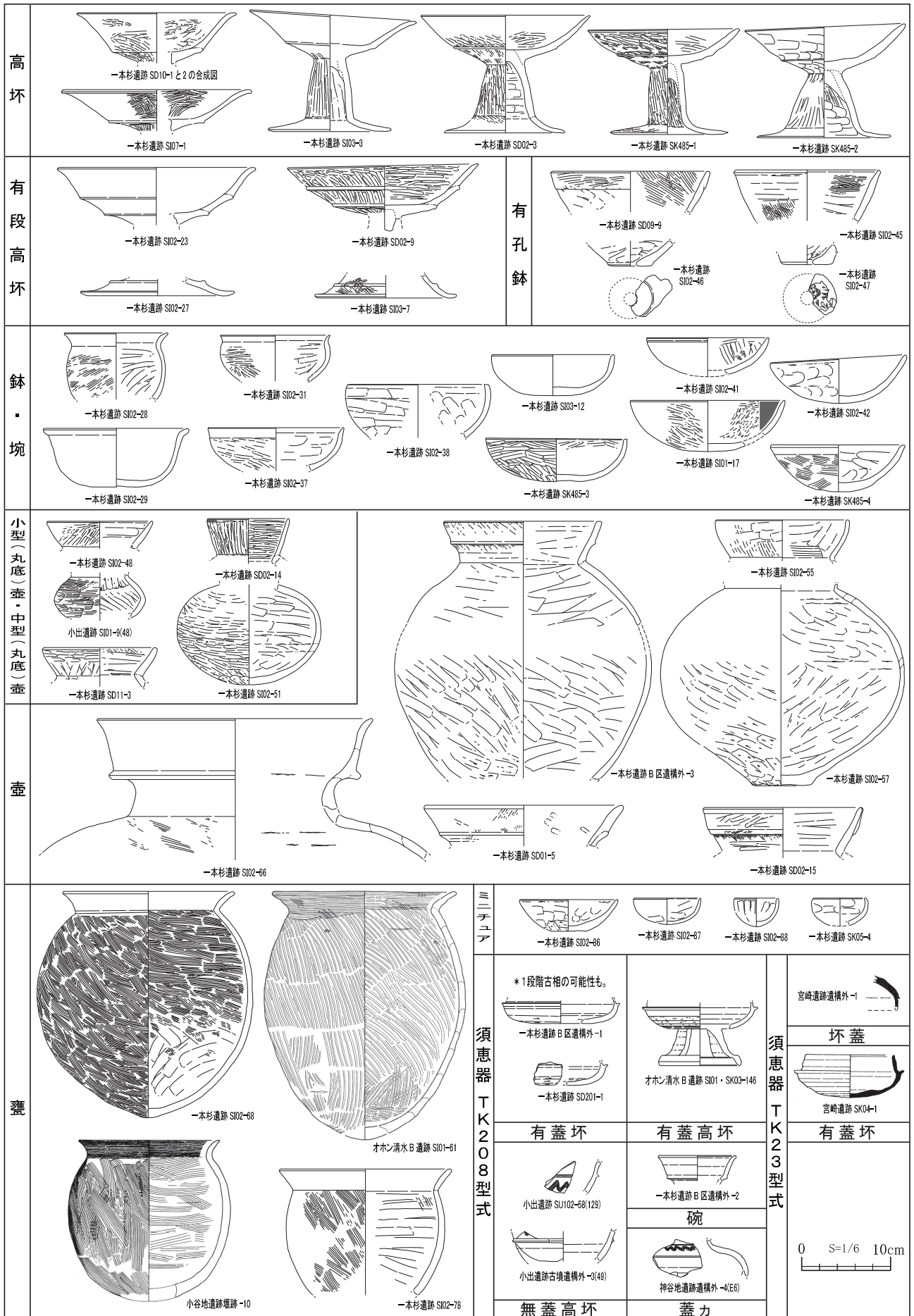


図 2 横手市古墳時代遺跡群の土師器と須恵器

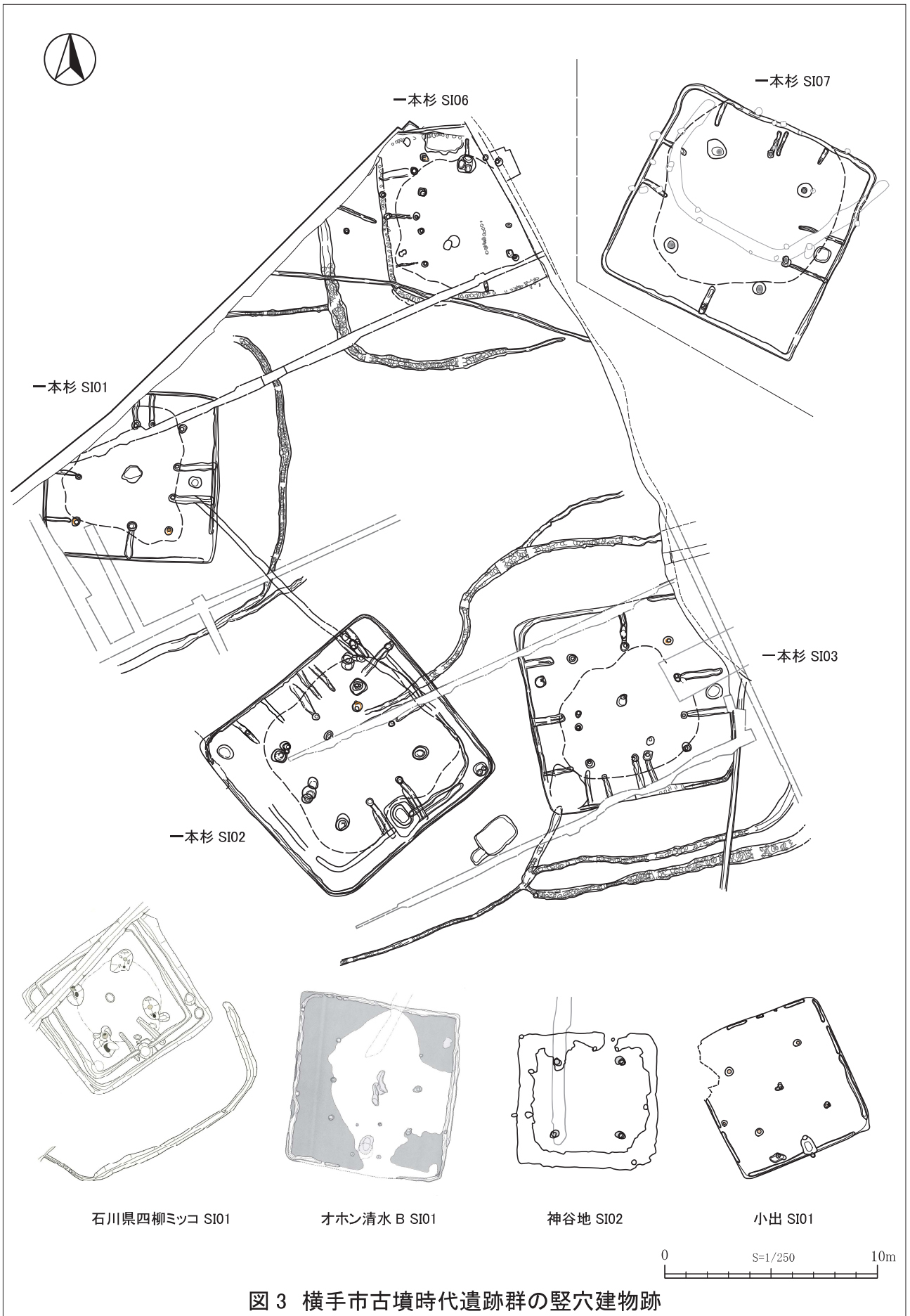
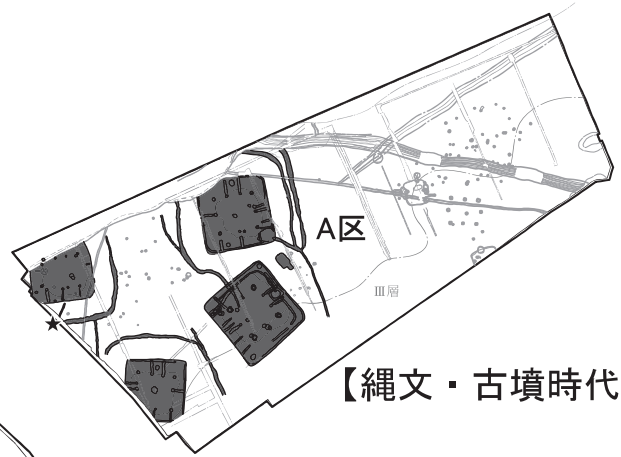


図3 横手市古墳時代遺跡群の竪穴建物跡



★印のみ縄文時代

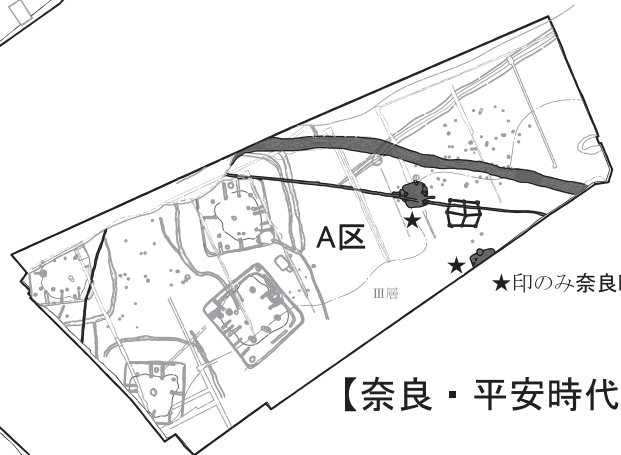


【縄文・古墳時代】

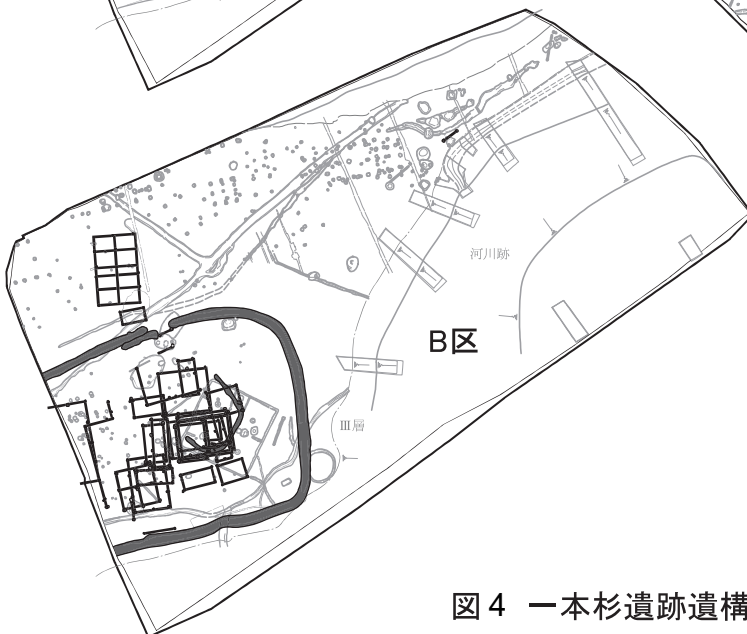


★印のみ奈良時代

【奈良・平安時代】



【中世・近世】



0 S=1/1,000 50m

図4 一本杉遺跡遺構変遷図

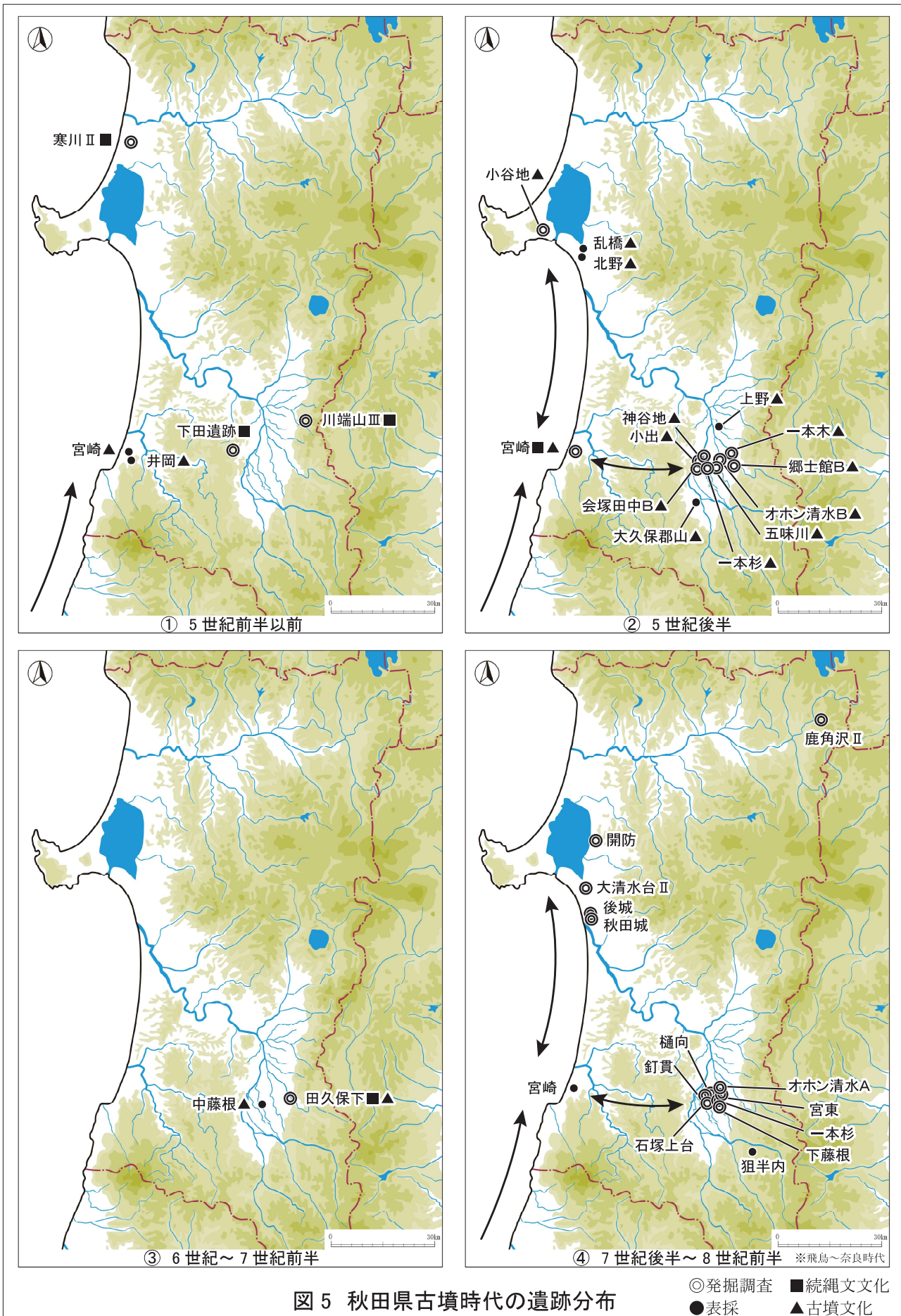


図5 秋田県古墳時代の遺跡分布